

『ナンシー』は『のら』に「何か飲むか」と尋ねた。『のら』は「ミルク」と答えると、「マスター、ミルクとロック」と言っ、後ろの仲間のテーブルに腰を掛けた。『のら』は出されたミルクをペロペロと舐め始めた。その時お店の扉がチリンと音を発して開き、人が入ってきた。『のら』は目を疑ったが、それは紛れもなく『マナ』であった。

『のら』どこに行っていたんだ。探したぞ。さっき人が来て、どこに『のら』がいると教えてくれたんだ。『のら』は「迷子になったの。どこには『ナンシー』に連れてきてもらったの」と言った。『ナンシー』さん。じゃ、お礼を言わない」と『マナ』が言い、『のら』に「どの人」と尋ねた。『のら』は後ろを振り向き『ナンシー』を探したが、そこには『ナンシー』の姿はなかった。『ナンシー』は「と『のら』がマスターに尋ねると、『ナンシー』は恥ずかしがりやだから、もうどこかに行ってしまったよ」と言った。「気にしないでいいよ。良かったね」と笑顔でマスターは答えた。

帰りの電車の中で、『のら』は今日の色々な出来事を『マナ』に話していた。「ところで『マナ』は何を買ったの」と尋ねると、『マナ』は「あー、パソコンだよ」と言っ、パソコンの入った箱を見せた。「パソコン、また怖い機械なの」と『のら』が尋ねると、「うーん、ちょっとだけ怖いかも」と言った。「えー、でも今日も色々怖いことあったけど、とても楽しかった。だから大丈夫」と言っ、パソコンの箱を撫ぜた。「そうそう、『のら』にもあるんだ」と言っ、新しいシャツとパンツ、そして風呂敷を渡した。『のら』は新しい服を広げ、「ピカピカ、スベスベ」と言っ、何時までも新しい服を眺めていた。

